

『浜松中納言物語』の渡唐中の恋をめぐる和歌の役割考

—— 男主人公の〈題号由来歌〉と

唐后の「波の上の」詠をめぐる…… 松浦あゆみ… 315

*

物語における和歌とは何か・再考

—— 『小式部』と『紫式部物語・和泉式部物語』…………… 高橋 亨… 339

あとがき…………… 辻 和良… 355

執筆者紹介…………… 001 ㊦

はじめに

かつて古代遺跡から発見された木簡に書かれた和歌が大きな話題になったことがある。考古学や歴史学では、それまで資料として捉えてこなかった「新しい」遺物として脚光を浴びたことが思い出される。国文学の側の受け止め方としては、仮名の成立や和歌の成立の問題を展開できる可能性を予感したことは記憶に新しい。

ただ、今にして思えば、木簡に漢字の仮名を用いて和歌が記されたことの意味は、単に漢字文化の受容という、一方的な現象としてあるというよりも、音声としての和歌をどのような方法で書き留めるか、というところに表現者の苦心と工夫があったとみてよいであろう。

さらに言えば、その背後にある過程は、漢詩から和歌へという一方的な影響や受容の局面ではなく、漢語では書き記すことの難しい和歌を、漢字を用いてどう記すかという問題なのである。ここで、すぐに想起されることは、風土記では一般的に、神名や地名、神話の表現は一字一音で表記されるのに、神々の行動は漢文体で表現されるといふ、原則的な区別が認められることである。例えば、『常陸国風土記』においては、歌謡が漢詩の形態で表現され、和歌が漢字を仮名として一字一音で表記されるという、方法的な区別がなされているということがある。いったいなせそんな必要があったのか。おそらく漢文で翻訳できる部分はそれでよいとして、どうしても日本語の表現をそのまま残したい箇所があったのではないか。

つまり、漢詩・漢文を意識して翻案、翻訳した和歌もあるが、漢詩・漢文とは別にまず、和歌ありき、だったのではないか。そもそも漢詩・漢文の表現とは相容れない存在として、和歌はすでに独立性の強い存在として

在ったのではないかと。もしかすると、ここには在来の伝統と外来の流行との対立が隠されているのではない。日本における文化を重層的に捉えたとすれば、平安時代にあつては、漢詩・漢文が歴史や政治を担った、いわば意識的な世界に属するとすれば、和歌は在来で伝統的な無意識的な世界を担っていたのではないか。いやいや、それでも政治の中に和歌は組み込まれている。『萬葉集』において、天皇の行幸に従駕した歌人たちが、長々と和歌を詠んだことは、古代天皇の国土を讚美し、大王を神聖なる古代天皇として確立して行く営みであった。平安時代においても、行幸に連なり饗宴で活躍した歌詠みの家、歌詠みたちの担った伝統は重要である。ここでは和歌は晴のものであるが、彼等が日常的に褻の和歌を詠んだことも疑えない。詠歌の場の公私の区別が、和歌の違いをもたらしているといえるであろう。

考えて見れば『古今和歌集』の和歌といつても、『萬葉集』以後の「読み人知らず」の和歌、そして六歌仙の和歌、そして撰者時代の和歌すなわち「現代」の和歌というふうには、幾つかの層をなしていることは自明のことであろう。漢詩・漢文と和歌との緊張関係は必ずしも一様ではない。

さてそこで、そのような『古今和歌集』の時代の前後に、『竹取物語』や『伊勢物語』を位置付けてみれば、和歌がどのように物語に組み込まれているかという問いは、難しいがしかし重要なこととして成り立つ。『竹取物語』の和歌は、和歌というにはきわめて説明的であり、あたかも物語の内容に合わせて「作られた」感じの強いものである。ところが、『伊勢物語』の和歌は、古注・旧注の時代から指摘されてきたように、多くの章段において、もともと独立性の強い伝統的な和歌を、物語がどのように組み込んだのかという局面が想定できる。

あるいは、紫式部の場合、どのような問題が予想できるであろうか。ことはさらに複雑である。というのも、

紫式部の著作物は、周知のように『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』を挙げることはできるが、それぞれのテキストにおける和歌の「置かれ方」と役割とは全く違う。

例えば、『紫式部日記』と『紫式部集』との間には、全く同じ和歌が記載されている。ところが、和歌の置かれている文脈が違う。おそらく藤原道長から皇子誕生の記録を記すように命じられたと思しき『紫式部日記』では、晴の和歌と褻の和歌とは明確に区別して記されている。しかし、晩年の自撰とされる『紫式部集』では、晴の和歌も私の記録として掲載され、晴と褻との対立は『紫式部日記』よりもはるかに稀釈化されている。それは、それぞれのテキストの書かれた目的や意図が異なるからである。これは、物語とも呼ばれる『和泉式部日記』と家集『和泉式部集』との間にも生じる問題であろう。

一方、『源氏物語』における和歌の晴と褻との相違は、同じ登場人物であっても、詠歌の場の違いによって顕著に認められる。つまり、同じ登場人物ならいつも同じような和歌を詠むわけではない。さらにいえば、晴と褻との対立は、褻の中にも「晴としての褻」と、「褻の中の褻」とがあるときとさえない。すなわち、親しい間柄であっても儀礼的な詠みかたをするときと、ずっと打ち解けた詠みかたをすときがある。晴の和歌を詠むときに縁語・掛詞・序詞などといった表現の技巧は駆使されるであろうが、打ち解けた場における褻の和歌に、そのような技巧は不可欠ではない。不要なときもあるに違いない。このような晴と褻との対立は、公と私との対立とも重なっている。

さて、『源氏物語』におけるこの晴と褻との対立は、特に離別歌や哀傷歌において顕著である。というのは、『古今和歌集』の離別歌には、公の儀礼としての離別の場の和歌が多く記録されているのに対して、私家集における離別歌には、褻の場の離別歌が多いと予想できるからである。いずれにしても、『源氏物語』における和歌

を捉えるには、晴と褻との関係を無視することができない。もしそうであるならば、贈答歌・唱和歌・独詠歌といった馴染みのある分類は、再検討を要するであろう。

そもそも贈答・唱和・独詠といった概念も、森岡常夫氏と小町谷照彦氏との間では、妥協できないほどの懸隔がある。今、目の前にいる相手との贈答は、相手の和歌に応えるという意味で唱和ともいえるし、これと消息を介した贈答とが同質だとは簡単にはいえそうにない。また独詠といっても、詠歌主がほんとうにただ孤立して他に誰もいない場合もあるし、女房のようにそこで唱和してくれるような存在がいながら、結果として贈答唱和となってしまう場合だってある。つまりこの区分は曖昧さを抱えている。さらに問題は、独詠と分類されてきたものの中には、見えない存在に対する呼びかけだけあってありうるからである。

かつて、三谷邦明氏が「物怪が和歌を歌う」ということに注目されたことがある。確かに『源氏物語』の物怪と、それ以前のテキストとは描かれ方がまったく違う。それだけでなく『源氏物語』の和歌には、人と人との間に詠まれる和歌が全てではない。例えば、賀茂神に対して光源氏の詠みかけた和歌、御陵に眠る父故院に向かつて光源氏の詠みかけた和歌、八百萬神に対して光源氏の詠みかけた和歌などがある（須磨巻）ことはすぐに思い付かれる。これらは、神格、仏格だけでなく、物怪のような靈格に対する呼びかけに発する応答の手段として、和歌が用いられているといえる。のみならず、桐壺更衣の絶命直前の唱和の場合も、帝と更衣との贈答であるし、帝の弔問の和歌に対して更衣母の応えた和歌という晴の贈答と、亡き桐壺更衣の母と弔問に向いた命婦との間に交わされた和歌という褻の贈答とが組み合わされ、表現されている場合もある（桐壺巻）。あるいはまた、朱雀帝と光源氏との間で交わされる和歌の贈答唱和（明石巻）のように、『源氏物語』において和歌は世俗の人と人との間にだけ限定されたものではない。

もちろん後期物語においても、多数の和歌が物語に組み込まれていることはいうまでもない。それでは『狭衣物語』ではどうか、『夜半の寢覚』ではどうか、結局のところ物語のテキストそれぞれの中に和歌が組み込まれる「組み込まれ方」は違うのだという問題に帰着するより他はない。だからこそ、物語と和歌とをめぐると、どのような問題意識を共有した上で、「物語における和歌とは何か」という問いは、テキストごとに個別の問題として問われる必要があるにちがいない。

廣 田 收